祭事が地域運営に与える影響に関する研究

- 埼玉県秩父市における秩父夜祭を対象として -

A RESEARCH OF THE INFLUENCES FESTIVAL HAS AFFECTED REGIONAL MANAGEMENT

- A case of Chichibu night festival, which takes place in Chichibu, Saitama prefecture -

根岸 亮太*, 後藤 春彦**, 田口 太郎***

Ryota NEGISHI, Haruhiko GOTO and Taro TAGUCHI

Urbanization has declined the local community, which has organized mutual relationship in suburban areas. But in those areas, indigenous identity of the local community, such as festival, has incubated the foundation for regional management.

Now in Chichibu, Chichibu night festival has a position of regional identity and it seems to have affected regional management. This study aims to clarify the influences of regional identity for local community. And I clarified four influences festival has affected regional management, 1) Participation of outsider 2) Assembling and raising of younger 3) Incubation of relationship in areas festival is managed in 4) Possibility of transfer's participation. These influences have possibility that they would lead area to good circumstance regional management goes on in by mutual relationship.

In future, we should remind these influences of festival and carry on regional management with festival.

Keywords: Festival management, Regional self-government, Regional management, Community

祭事運営、地域自治、地域運営、コミュニティ

1. はじめに

1-1 研究の背景

戦後、社会学の分野ではコミュニティを巡り様々な議論がなされてきた。それは地縁組織の典型としての町内会・部落会の否定から始まり、地域共同体の束縛からの離脱を肯定するものであった。しかしその結果としての都市型生活は、私的自由主義と行政依存型の生活様式となり、地域住民が共に助け合うコミュニティの根源的要素は薄れていった。近年、日本は戦後初めての人口減少を迎えた事から改めて地域運営の重要性が叫ばれている。私より公を優先したかつてのムラは確かに息苦しいものであったのかもしれない。しかし、かつてのムラが共有していた祭事等のアイデンティティは、地域共同体にとっては地域運営を潤滑に進めるための要素として機能していた。

今後の地域運営を考えていくにあたり、地域で共有されているアイデンティティが地域運営に与えてきた影響を見つめ直す事は、今後の地域運営の指針を得るためにも重要である。

1-2 研究の目的

本研究では、秩父夜祭の行われている埼玉県秩父市中心部を対象として、①祭事が町内の地域運営に与える影響の変化、②祭事が町間の連携の醸成に与える影響、を明らかにする。これにより秩父夜祭が地域の伝統文化として現在もなお地域運営に与えている影響を示し、現代における地域と地域固有のアイデンティティとの関係性を明らかに

にする。

1-3 研究の枠組みと方法

本研究のフローを図1に、本論文における用語の定義を表1に示す。2章では対象の選定及び対象の概要を述べる。3章では文献及びヒアリング調査から、大正期と現在の地域自治及び祭事運営の体制の違いを明らかにする。4章ではヒアリング調査から、町場における地域運営の現状を明らかにする。5章ではヒアリング調査から、田舎における地域運営の現状を明らかにする。6章では3章及び4、5章より祭事が町内の地域運営に与える影響の歴史的变化を明らかにする。7章ではヒアリング調査から、祭事が町間の連携の醸成に与える影響を明らかにする。8章では6、7章より得られた結果をもとに、祭事が地域運営に与える影響を示し、これをもとに祭事が地域運営に対し現在与えている影響及び祭事が今後の地域運営に対し与え得る影響の展望を述べる。

表1 用語の定義

地域自治	本研究では、議会、組、町内会を主体とし地域内の人々が自ら公的活動を行う事を指す。
地域活動	地域自治や趣味の集まり等、その地域で行われる様々な活動。
地域運営	地域自治や祭事、地域活動といった一連のまちづくり活動を広く指す。
屋台町	祭事運営の基盤となっている、一町会から複数町会によるコミュニティ単位。
町場	人家や商店などが多く町になっている。本研究では上町、中町、本町を指す。
田舎	田畑が多く人家が少ない。本研究では宮地、中近、下郷を指す。
奉曳	屋台の運行を行うこと。

* ケネディクス・リート・マネジメント㈱

** 早稲田大学理工学部建築学科 教授・工博

*** 新潟工科大学工学部建築学科 准教授・博士(工学)

Kenedix REIT Management, Inc.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Science and Eng., Waseda Univ., Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture and Building Engineering, Faculty of Eng., Niigata Institute of Technology, Ph. D.

1-4 研究の位置づけ

本研究は地域と祭事との関係に着目した研究であり、その歴史的な変化から今後の地域運営体制の展望を得るといった地域運営研究の枠に位置づけられる。また、その中でも本研究は地域コミュニティ、祭事を扱った一連の研究に位置づけられる。

地域コミュニティに関する研究としては、三好ら²⁾、山本³⁾らの研究のようにニュータウンにおけるコミュニティ形成に関する研究が多く見られる。一方、伝統的な地縁によるコミュニティ形成に関する研究として、佐藤ら⁴⁾は地域の有力な富裕層の活動が地域社会の構築及び都市空間の変容に与えた影響を明らかにする事により、新たな近代地方都市形成の視点を提示した。また、岡村ら⁵⁾は公共基盤整備に参画する住民や地域組織の在り方を探る一環として、町村制施行以前に成立した村落共同体による道路整備の特徴と村落共同体の役割を明らかにした。

祭事を扱った研究としては、社会学や生活学からの見地による研究^{注2)}が多いものの、石川ら⁶⁾は屋台奉納、屋台運営の手法、運営基盤としてのコミュニティそれぞれの特徴や変化を明らかにする事で、祭礼が発展してきた経緯と共に祭礼が衰退せず発展していくための基礎的条件を読み取った。また、増井ら¹⁰⁾は京都の祇園祭山鉾町における町会所の現状調査から、京都の歴史的都心における伝統的共用施設の機能と存在意義を述べている。一方、秩父夜祭についての研究は松平、藺田、浅見、ら^{注3)}により、それぞれ宗教学や社会学、民俗学等の多様な視点からの研究が成されている。

本研究では祭事を地域コミュニティが共有するアイデンティティとして捉え、祭事が地域運営に与えてきた影響の変化を辿るとともに、今後の祭事が地域運営に対し与え得る影響の展望を明らかにする事に着目している。

2. 対象の概要

2-1 対象の選定

我が国における祭事は、祈年祭、新嘗祭といった国家祭礼や、正月、御霊祭といった村びとによる祭事として古くから行われてきた¹¹⁾。このように祭事は本来、神を祀る事に始まったものであり、各地域に必ずと言ってよい程存在していた。しかし現在では地域から失われてしまった祭事も多く、また本来の目的が形骸化イベントの一種となってしまっている祭事も多い。近年全国各地において多様な形態をとる祭事¹²⁾の中でも、山・鉾・屋台の祭り^{注4)}（以後、山鉾祭り）では現在もなお祭事と地域とが密接に関わっている^{注5)}。

以上の事から、本研究では山鉾祭りを持つ地域について着目する。山鉾祭りはその総数は未詳であるものの、全国でなお1,500件に及ぶと推定されている¹³⁾。山鉾祭りは地縁組織とともに成長し、町組という都市共同体の祭礼として立ち現れた¹⁴⁾。それぞれ地域の多様性を持ちつつ発展した山鉾祭りは、現在でも山車の運営や保存といった面で、なおも地域との密接な関わりを持っている。本研究では、これら山鉾祭りのうち、京都祇園、飛騨高山と並び日本三大曳山祭の一つに数えられる秩父夜祭を対象とする。

2-2 秩父夜祭の概要

秩父夜祭は秩父神社例大祭として、秩父市中心部において例年12月3日を中心とした6日間に渡って行われる祭である。12月2日から3日にかけては、付祭^{注6)}として6つの「屋台町」から山車が曳き

出される（図2）。

「屋台町」は行政区画としての町丁目とは異なり古くからその土地で形成されてきた独自の

表2 屋台町と町会の関係

屋台町	町会（行政区画）	かつての地域	現在の地域	山車の種別
上町	上町1～3丁目	町場	商業地	屋台
中町	中町			
本町	本町			
宮地	上宮地町、中宮地町、下宮地町	田舎	住宅地	山鉾
中近	中村町1～4丁目、近戸町			
下郷	金室町、永田町、柳田町、阿保町、大畑町、滝の上町			

地縁組織であり、現在でも複数の町会を単位として構成されている。（表2）。山車の奉曳や保存は各屋台町が担っており、長きに渡り地域と祭事とが密接な関係を築いている。

2-3 秩父市中心部の概要

秩父市は、都心から北西約80kmにある秩父盆地中央部に位置している（図3）。古くは養蚕や秩父銘仙により栄え、その後はセメント業が主産業となってきた。現在は「平成の大合併」により市内人口は増加したものの、セメント業の衰退から深刻な過疎・高齢化が懸念されている。また、秩父地方には秩父夜祭の他にも山車が数多くあり、祭事が活発な地域であると言える^{注7)}。

図2 屋台町と町会

図3 対象地の位置

なるものの、地域の代表者である役員により区長が決定されていた。区会の運営方法に現在との違いはあまり見られない。

祭事運営は組制度により行われており、「宮地」の御三家により3つの組が組織されていた。「宮地」に住む者は3つの組の内1つに加入した。各組は1年交代で祭事費や奉曳の手配等の祭事運営を取り仕切っていた。祭事費は当番組を中心に拠出され、当番組の富裕層がその多くを拠出した(表5)。人足には毎年全組の町民が参加した。

3-3 現在の地域運営体制

3-3-1 現在の本町における地域運営体制

現在の本町は商店街となっているが、人口は極めて少ない。地域自治は町会によって行われ、夏祭りや秩父夜祭といった大きなイベントからラジオ体操や納涼大会まで様々な活動を行っている。

祭事運営は、町会内の祭事部の指揮のもと行われている。祭事費は町会費及び文化財指定による補助金、町外者からの祭事参加費により賄っている。人足には有志の外郭団体である達磨会^[15]の他、ワッペン^[16]を購入した町外の人々が曳き子として参加している。

3-3-2 現在の中宮地町における地域運営体制

現在の中宮地町は住宅地となっており、大正期に比べ人口は増大した。地域自治は上宮地町町会、中宮地町町会、下宮地町町会とそれぞれ行政区毎の町会がその地域内の地域自治を行っている。

祭事運営は行事の指揮により行われ、保存会が屋台の保存管理を行っている。これら組織は上、中、下宮地町を包括して組織される。祭事費は町会費及び文化財指定による補助金により賄われている。人足には地域内の若手による若衆会、飛騨会^[17]といった組織やワッペン^[16]を配布された「宮地」内の人々が曳き子として参加している。

3-4 大正期と現在における地域運営体制の特徴

本町では現在まで地域自治と祭事運営とを同一の組織により行っ

図7 大正期における地域運営

図8 現在における地域運営

図9 町会費と祭事費との関係の変化

てきている。一方、中宮地町では大正期には地域自治と祭事運営とが全く異なる組織により行われていた。現在では地域自治は各町会、祭事運営は3町会を包括した組織により行われている。

大正期には、地域自治の執行及び意思決定、祭事運営の指揮はともに地域の有力者を中心として行われていた(図7)。また、町内費、祭事費もその多くが有力者により拠出されていた。

現在の地域自治は町会長を中心として行われており、町会長は町会内の各組織の代表で構成される意思決定部により選定されている(図8)。町会費は市からの補助金の他、多少の偏差はあるものの町会加入者から等しく集められている。一方、祭事運営では両者異なった運営体制をとっている。本町は町会内の祭事部が祭事運営を主導しているが、人足や祭事費について町外者の積極的な参入が見られる。中宮地町では3町を包括した新たな祭事運営体制が形成されており、地域内の世代毎に様々な祭事運営主体が形成されている。また、両町とも祭事費に文化財指定による補助金が入っている(図9)。

以上から、大正期には地域の有力者が中心となる事で、地域自治、祭事運営が行われていたと言える。一方、現在では町民は等しく地域自治、祭事運営に関わっており、地域内のみならず町外者や転出者、自治体等からの様々な支援も見られる。また、祭事運営に関して、特に町場である本町では大正期も現在も町外者との関わりが強く見られる。一方、田舎である中宮地町では祭事は行政区画とは独立した自律的な組織により行われている。

4. 町場における地域運営の現状

本章では、町場における地域運営の現状を明らかにする。本町町会の組織図を表6に示す^[18]。

4-1 本町における祭事と各運営主体

本町は秩父夜祭の他、夏期に川瀬祭^[19]を行っている(図10)。秩父夜祭は祭事部を中心として運営されるが、青年部や保存会、達磨会等の多様な主体の参加が見られる。

川瀬祭では青年部が中心となり祭事運営を行っている。また、青年部は他の様々な地域活動に対しても積極的に参

図10 町内の祭事と祭事運営主体

表6 本町町会組織図

●祭事に関連のある組織

図 18 中宮地町における祭事運営主体と地域運営との関係

図 19 柿沢祭復活及び青年部設立の経緯

図 20 若手の地域への参加過程

5-2-2 柿沢祭の運営

戦後、柿沢祭では山車の曳き回しが行われなくなり、その後祭事自体も行われなくなっていった。しかし、1995年に若衆会等の地域の若手による議論を経て、30年以上開催が中止されていた柿沢祭が復活した(図19)。これに伴い、翌年に秩父夜祭の運営に積極的に参加していた若衆会や飛騨会のメンバーを中心として柿沢祭の運営のため町会内に青年部が組織された。柿沢祭はこの青年部を中心として行われている。

5-3 中宮地町の地域自治に見られる近年の変化

青年部は当初柿沢祭の運営主体として設立されたが、現在は祭事運営のみならず地域の勉強会から公会堂の掃除まで様々な地域活動を行っている(図20)。また、町会内の他団体との交流も積極的に行っている。青年部は町会への積極的な貢献から、現在は執行部の一角を担う組織となっている。

5-4 中宮地町における地域運営の現状

「宮地」では地域内で祭事運営を潤滑に行う事が出来ている。年長者である行事、保存会から若手による若衆会、飛騨会まで秩父夜祭の運営を支えるための多様な組織が3町会を包括して形成されている。若手にとつての地域の受け皿はこの若衆会や飛騨会のみであったが、中宮地町では若衆会、飛騨会に参加している若手が休止していた祭事を復活させるとともにその運営主体として青年部を組織した。この青年部が地域の若手に広く開かれた受け皿となり、現在では柿沢祭のみならず地域活動にも多大な貢献をしている(図21)。

図 21 中宮地町における地域運営

6. 祭事が町内の地域運営に与える影響の変化

本章では、3章及び4、5章より祭事が町内の地域運営に与える影響の変化を明らかにする(図22)。

6-1 町場において

大正期の本町には大店や花街が連なっており、祭事運営は町内の有力者を中心として行われていた。町場においては行事が地域自治の中心も兼ねていた事から、有力者が地域運営全体を主導していたと言える。その中で祭事の人足においては、範囲が狭く人も流動的である町場という特性から地域に関わる様々な町外者を積極的に参加させていたと考えられる。

現在の本町は深刻な人口減少に悩まされている。そのような中、本町では秩父夜祭に町外者を積極的に参加させている。それはかつての様な町に縁のあるものではなく祭り好きな町外者である。町外者のうち特に祭事に興味のあるものは達磨会といった祭事運営組織を作っており、現在の本町では彼らなくして秩父夜祭は成立しない。また、彼らは川瀬祭、地域活動にも積極的に参加している。このように現在の町場では、祭事が町外者を町に巻き込む要素となっている。この結果、町外者も含めた広域的な範囲の人材により地域運営が行われている。

6-2 田舎において

大正期の中宮地町は「宮地」内で3つの組を作っており、組の持ち回りにより祭事運営を行っていた。祭事運営はそれら組の組頭を中

図 22 祭事が地域運営に与える影響の変化

心として行っていた。田舎においては、祭事運営と地域自治は異なった組織により行われており、田舎という特性からより広域的な組織を作る事で負担を分担し人々が祭事に関わっていきこうとしていたと考えられる。

現在の中宮地町は住宅地となり人口が増加している。地域自治は現在も各行政区画毎に行われている。祭事運営については屋台町内の人材が豊富である事から、世代別に組織が作られており階層毎に役割を持ち祭事運営に参加している。そのような中、中宮地町では祭事運営主体に属する若手が地域の祭事を復活させるとともに、その運営のために青年部を組織した。青年部は町会における若手の受け皿となり、現在では町会において重要なポストを得るまでに至っている。このように現在の田舎では、豊富な人材の受け皿として祭事運営主体が階層化されている事が若手にとっての地域の受け皿となっている。その結果、地域の若手が育成され地域運営全体に対し自立した参加を始めている。

7. 祭事が町間の連携の醸成に与える影響

本章では、祭事が町間の連携の醸成に与える影響をヒアリングより明らかにする（表8）。

7-1 祭事運営組織間の連携

7-1-1 秩父における連携

秩父夜祭については町会内のみならず屋台町内でも様々な話し合いが持たれており屋台町内での交流が図られている。また、四町会議^{注29}等といった屋台町間での話し合い等も開かれており、屋台町間での交流が図られている。しかし、あくまでも祭事運営に関する話し合いの場であることから、顔見知りになることはあってもそこから祭事以外の新たな活動は生まれていない。

7-1-2 全国における連携

文化庁から文化財指定を受けた祭事が集まり「全国山・鉾・屋台保存連合会」という組織を形成している。この会は山鉾祭を持つ町

表8 町間交流について

祭事運営に関する交流			
町会内	屋台町内	屋台町間	全国
・屋台の奉仕に関して、時間だとかについての町会町会話し合いは非常に多い。(E) ・人間的なつきあいをしているのは祭りを通して町内もそうだけど町外の人ともものすごくある。	・3つの宮地の保存会の人はお祭りの時期だけじゃなくて絶えず集まる機会があるんですよ。(C) ・京間保という事になればやはり中宮地単独というわけに行かないものが多いです。(C) ・夏の柳沢祭などかつて規模は小さいけれど、でも下宮地と滝ノ上と連絡取り合っていて調整していかなくちゃならない。(C)	・屋台四町だけで四町会議なんというものをやったり、具体的にはそういう様な事もお祭り前になるときちんとやっています。(E) ・やっぱりお祭りという一つのイベントを通じて結構人と人の交流するのはあります。並井と屋台を持つ町会の交流というのは毎年必ずあります。(E)	・全国山・鉾・屋台保存連合会という大きな組織があるんですよ。国の重要文化財に指定されている様な団体が入っているんですけど、大体一年に1回ずつ持ち回りどこかの町へ行くと、全国のそういう山鉾を持っている町会の人達との色々な交流もあります。(E) ・全国山・鉾・屋台保存連合会の中に技術者部会なんのもあって、保存への選定がされたお祭りの山鉾の修理だとか幕に関する話などもしています。(E) ・今年も、ついでこの間秩父の屋台囃子をやってもらいたいって、栃木の鳥山の保存会長から電話がありました。(E)

地域自治に関する交流

・3つの宮地の交流って言うのは具体的にはそんなにはない。お祭りの行事が中心かな。(C) ・(町会間の交流は)そんなにはないですね。(C)

図23 町間における交流

間の交流の場となっており、山車の保存等に関する情報交換が毎年行われている。また、この会での交流をきっかけとして太鼓の派遣等の新しい活動も生まれている。

7-2 地域自治組織間の連携

町会では町内の地域自治のため様々な所属組織により多様な活動が行われている。そのため町会内組織間での話し合いも行われている。しかし、町会間については基本的に交流は図られていない。同屋台町であっても他町会との交流は祭事を介したもののみである。

7-3 町間の連携

地域自治組織である町会はいくまでもその地域の自治を行っており、他町会との交流等は基本的にはない。一方、祭事運営組織である屋台町は祭事運営のための詳細な打ち合わせが何度も開かれることから、他の屋台町との交流を図っている。また、山鉾祭を持つ地域とも全国的な交流を図っている（図23）。

8. 祭事が地域運営に与える影響の変化とその展望

本章では、6、7章より祭事が地域運営に与える影響の変化とその展望を示す（図24）。

8-1 祭事が地域運営に与える影響

①祭事が町内の地域自治に与える影響

町場では、深刻な人口減少から地域による自立した地域運営が困難になってきている。そのような中、かつて地域に縁のある者を惹きつけていた町場の祭事は、現在では祭好きな町外者を惹きつけており、町場の祭事は彼らの協力があり初めて成立している。また、それを契機として町外者が地域運営にも参加しており、祭事を契機とした広域的な地域運営体制が形成されている。

田舎では、人口増加から地域に潤沢な人材を抱えており、自立した地域運営が行われている。田舎の各祭事運営主体は年功序列的な階層を形成しており、これが若手の受け皿及び育成の場となっている。田舎の祭事は年功序列的な階層を持つことから、地域の人々の受け皿となり自立を促す地盤となっている。

②祭事が町間の連携の醸成に与える影響

祭事運営は綿密な打ち合わせが必要なことから町間で様々な交流が行われており、そこで様々な人々が知り合い縁を深めている。しかし祭事に関する交流は会議が主であり、様々な人との交流はあるものの町間の交流から新しい試み等は生まれていない。一方、全国での山鉾祭りに関する交流では新しい試み等も生まれている。

以上から、祭事は①町外者を町に巻き込む②町内の若手を結びつけ自立を促す③町間の人々の縁を深める、という3つの影響を地域運営に対し与えており、これにより現在では地域運営において①町外者の参加②若手の台頭が見られる。

図24 祭事が地域運営に与える影響

図25 祭事が地域運営に与える影響の展望

8-2 祭事運営が地域自治に与える影響の展望

祭事の持つ階層的な祭事運営主体は、現在でも地域の若手が集い祭事運営を通し自立を図る場となっており、今後も地域の若者を育成する場として地域運営に対して貢献していくと考えられる。また、町場では人口減少が町外者の地域運営への参加を促している一方、田舎では町内の人々により自立した地域運営が行われている。しかし人口減少化社会を迎えるにあたり、地域運営がより困難になっていくであろう事は明白であり、今後の潤滑な地域運営のためには早期から町外者や転出者を地域に巻き込んでいく事が重要である。そのためには祭事といった地域のアイデンティティが町外者、転出者を誘因する要素となり得る。また、現在の地域運営は自治体からの資金援助の上に成り立っているが、これも同様に町外者、転出者を積極的に地域に参加させていく事により行政支援からの脱却が図られ得る。その点からも町会区域を超えた広域的な協力体制を構築して行く事が重要である。また、祭事を契機とした町会内、屋台町内、屋台町間のネットワークは今後まちづくり活動が生まれる場ともなり得るのではないだろうか。

現在、地域において祭事運営は人足、資金面の負担の大きさから地域運営における足枷となりつつある。しかし、今研究から祭事運営が地域運営に対し貢献し得る事が明らかになった。今後、祭事運営のみならず地域運営を潤滑に進めるためにも、祭事を契機とした広域的な地域運営体制を構築していく事が重要である（図25）。

参考文献

- 奥田道大・大森弥・越智昇・金子男・梶田孝道「コミュニティの社会設計」1982年発行 有斐閣
- 三好康隆、柏原士郎、吉村英祐、横田隆司、飯田匡、川村崇「兵庫県三田市のニュータウンにおける居住者の地域活動への参加意向等の分析—郊外ニュータウンの持続的発展政策に関する基礎的研究（その3）—」2005年2月 日本建築学会計画系論文集 第588号 p.15～21
- 山本茂、鳴海邦碩、澤木昌典「千里ニュータウンの管理組織の役割に関する研究」2005年10月 日本都市計画学会 都市計画論文集 No.40-3 p.751～756
- 佐藤宏亮、後藤彦彦「近代蚕糸業地域における都市形成過程—本庄町における近代化に伴う富裕層の活動と空間変容—」2001年9月 日本建築学会計画系論文集 No.547 p.201～206
- 岡村勝司、内山卓太郎、遠藤暢彦「村落共同体「野沢組」の道路整備に関する研究」1995年6月 日本建築学会計画系論文集 第472号 p.133～139
- 松平誠「祭の社会学」1980年6月発行 講談社
- 松平誠「生活学 第十冊 秋の町内：近代における伝統的都市の祭りと生活集団の変容」1984年発行 ドメス出版
- 松平誠「都市祝祭の社会学」1990年2月20日発行 有斐閣
- 石川仁生、木下光、丸茂弘幸、長友信介「運営形態からみた西條祭りの内発的発展の基礎的条件に関する研究」2003年10月発行 都市計画論文集 No.38-3 p.877～882
- 増井正哉、谷直樹、新谷昭夫、田中敏宏、中村淳「歴史的都心における伝統的共用施設の現代的機能に関する研究—京都・祇園祭山鉦町の町会所について—」1992年 日本都市計画学会学術研究論文集 第27号 p.247～252
- 奥野義雄「祈願・祭祀習俗の文化史」2000年10月発行 岩田書店
- 祭典・無形文化審議会「祭典 無形文化・世界の祭」昭和33年10月発行 祭典・無形文化審議会
- 植本行宣「山・鉦・屋台の祭り—風流の開花」2001年11月10日発行 白水社
- 植本行宣、田井竜一「都市の祭礼—山・鉦・屋台と囃子—」2005年6月発行 岩田書店

- 15) 藪田稔「秋夜祭」有峰書店 1970年発行
- 16) 浅見清一郎「秋祭—祭と民間信仰」2005年12月発行
- 17) 早稲田大学地域社会研究会「地方圏域社会の研究—秋祭地域の事例—」平成6年12月発行
- 18) 財団法人 新生活運動協会「秋祭市の社会と市民生活—その構造と変容—」昭和46年3月
- 19) 秋祭市史編集委員会「秋祭市史」昭和37年5月3日発行
- 20) 埼玉県秋祭市役所「市勢要覧」昭和25年度発行
- 21) 秋祭市総務部庶務課「秋祭市統計書」昭和44年4月発行
- 22) 秋祭市総務部庶務課「市報ちちぶ」昭和45年度版
- 23) 秋祭市総務部庶務課「市報ちちぶ」昭和52、54、56、59、62、平成1、4、7、11、14年度版
- 24) 新井組「大正十四年十二月 祭費取立帳」
- 25) 全国山・鉦・屋台保存連合会「平成18年度 全国山・鉦・屋台保存連合会 総会資料」
- 26) 本町町会「平成18年度町会役員名簿」
- 27) 中宮地町町会「平成18年度 町会役員名簿」

注

- 注1) 例えば文献1。
- 注2) 例えば文献6、7、8。
- 注3) 例えば文献8、15、16。
- 注4) 山・鉦・屋台の祭りと、祭りを賑わす山や鉦等の造形物が曳き出される祭りであり、本研究では、それら造形物の総称を山車と定義する。
- 注5) 文献13、14による。
- 注6) 秋夜祭とは秋祭神社例大祭の呼称であり、秋祭神社例大祭においては様々な神事が執り行われる。秋祭神社例大祭自体は神社の創建時点から存在していたと考えられているが、山車の曳き出しは寛文年間頃に付祭として各屋台町により行われるようになり、付祭が盛んになったのは明和・安永期（1746～81）とされている。現在では、秋夜祭とはこの例大祭の付祭を指して言うことが多い。以後、本研究においても、この屋台町による付祭を秋夜祭として記述する。
- 注7) 文献15より、秋祭地方にはおよそ1,000人に1台の割合で存在している事が分かる。これは他地方の8,000人に1台に比べ明らかに高い。
- 注8) 本研究では大正期における祭事運営と地域自治との関係性を明らかにするために、既往文献の客観的データを用い、文献7、8より表4、文献24より表5を作成した。
- 注9) ヒアリング対象者を右図に示す。本研究では田舎から宮地を、町場から本町を対象として取り上げており、それぞれのまちにおける地域運営体制それぞれのまちにおける地域運営体制の変化を明らかにするために、それぞれの地域で地域自治、祭事運営を取り纏めている人々に対しヒアリングを行った。本論文では、これらヒアリングについての発言者を図左のアルファベットにより表記する。
- 注10) 文献8によると、本町では戦後の隣組解体を経て新樹クラブといった新しい町会組織が設立され町内再建を担い、現在の町会が組織された。またヒアリングによると、宮地では公会堂に明治期からの歴代会長の写真が飾ってある事から、戦後も同様の町会組織が存続したと考えられる。
- 注11) ヒアリングによると、一時は茶半額という制度により高校生をアルバイトとして雇う事で人足を確保していた。
- 注12) 厳密には保存会員とは全町民を指す。その代表者が集まり山車の保存管理を行っているが、本研究においては一般的に言われるように、それら代表者の集まりを指して保存会と呼ぶ。
- 注13) 個数とは町内における当年の公共費用分担割合を指す。その割合を「玉」と称し、費用総額を玉の総数で除して玉数単価を決定する。個数とはその玉の個数である。
- 注14) 大正14年度の「宮地」は新井組を当番組として祭事を行った。
- 注15) 遠藤とは数十年前に本町の高校生により設立された祭事運営主体である。設立当初は太鼓のサークルであったが、様々な地域から太鼓や下方に興味のある者が集い、現在では本町の祭事運営において欠かすことの出来ない組織となっている。
- 注16) 秋夜祭では、曳き手を明確にするため各屋台町の曳き子はワッペンを着けるよう警察から言われている。ワッペンの位置づけは町会によって異なり、本町では山車を曳きたい者に売り参加させている。ワッペン代は祭事の運営費として川瀬祭、秋夜祭の祭事費の中に入れられる。宮地ではワッペンは町内の者に抽選で配布される。ワッペンによる参加者を以後、ワッペン参加者とする。
- 注17) 若衆会、飛躍会とはともに地域の若手を主体とした祭事運営組織である。正式には祭事に関する半公認団体であるが、その活躍は目覚ましく地域内でも認められた祭事運営主体である。
- 注18) 祭事運営には実に様々な組織が関わっているが、本研究においては祭事運営主体の内、祭事運営を主たる目的として持つ主体を対象とする。よって消防団等については、本研究においては祭事運営主体として取り扱わない。
- 注19) 川瀬祭は毎年7月19・20日に行われる秋祭神社の夏期例大祭である。上町・中町・本町・道生から屋台が、番場・宮内・東町・熊木から鉦が曳き出される。これら各町会から曳き出される山車は秋夜祭よりも小型である。地元では冬の秋夜祭が大人の祭、夏の川瀬祭が子供の祭と対比されている。
- 注20) 会友とは町外から本町町会に参加している者であり、年間の会友費を払い町会に加入し祭事等に参加している。
- 注21) 桶沢祭は毎年行われる夏の祭であり、中宮地町・下宮地町・滝の上町から鉦が曳き出される。戦後数十年に渡り行われなくなっていたが、平成8年7月28日に地域の人々の尽力のもと復活し、以後毎年行われている。
- 注22) 秋夜祭の開催に当たり、各屋台町は町内での話し合いを開く他、屋台町6町が集まり話し合う六町会議や屋台を持つ4町による四町会議を開き秋夜祭に関する綿密な打ち合わせを行う。

ヒアリング対象者一覧

	所属	役職	調査日
A	本町町会	町会長	H18/11/4 12/15
B	本町屋台保存会	会長	H18/11/4 12/15
C	中宮地町町会	町会長	H18/9/1 11/1 12/15
D	中宮地町町会青年部	初代部長	H18/11/2
E	宮地屋台保存会	会長	H18/9/1 12/15
F	宮地屋台保存会	会員	H18/12/16

(2007年3月7日原稿受理、2007年8月27日採用決定)